

ラフカディオ・ハーンの『心』と祖先崇拝

Lafcadio Hearn's *Kokoro* and Ancestor Worship

貝 嶋 崇

KAIJIMA Takashi

Lafcadio Hearn (Patrick Lafcadio Hearn, 1850-1904, hereinafter Yakumo Koizumi) is well known as a Greek newspaper reporter, novelist, and English teacher. As a travel writer in a world where Western culture comes first, he also tried to convey to the world in English the uniqueness and superiority of Japanese culture as seen from the eyes of Westerners with a sense of mission as a successor. As for his method, we can see his attitude of using his own five senses to explain the quintessence of Japanese culture, which does not appear superficially to Westerners, in an easy-to-understand manner. This paper discusses ancestor worship and Shintoism mainly in *Kokoro*, a Japanese cultural research book written by Yakumo Koizumi.

序

ラフカディオ・ハーン (Patrick Lafcadio Hearn, 1850-1904, 以下小泉八雲) は、ギリシャ出身の新聞記者、小説家、日本研究家、日本民俗学者であり、さらに英語教師としても知られているがそれだけではない。自分の五感で直接経験した文化を印象的に伝える紀行文作家として、日本という国の文化の伝承者として、とりわけ西洋文化第一主義の世界の中にありながら西洋人の目から見た日本文化の特異性や優位性などを優しい愛情で、英語で世界に伝えようとした。日本に帰化し、信頼する教え子のためにも、その伝承者としての一種の使命感のようなものを感じて日本文化を伝えようとした。これまで、日本文化を海外に伝えるものは、比較的、日本文化を矮小化し、野蛮なものとして否定的に紹介するものが多かったからである。それは後に紹介するピエール・ロチなどの姿勢を見ればわかるだろう。

また、その伝承の方法として、小泉八雲の著作には、五感だけではなく、五感では捉えきれないような第六感までを駆使して伝えようとしている。また、その対象は、表面的には現れない日本文化の神髄である。日本文化の内面性への強いこだわりは、単に日本を気に入ったからというばかりではない。大谷正信などの教え子や、せつ夫人また子供たちとの交流で感じられた日本人の繊細な本質を正當に評価しようとするもので、日本文化を表面的、扇情的に異国情緒を誇大に描くのではなかった。むしろ、西洋人にもわかるように、科学的に伝えようとした。本論文では、小泉八雲の書いた日本文化研究および海外に向けて日本文化を五感を駆使して紹介した『心』をもとにして小泉八雲が特有で稀有なものとしたものについて論考してみたい。

小泉八雲は来日以来、日本を気に入る、そこに理想の文化を見いだした。日本上陸の前に、最初に横浜港の海から見た霊峰富士山を日本人でさえ驚くほどに、まるで印象派の絵画をことばで見事に描写している部分が「ある保守主義者」でも描かれている。そうした印象派風の情景描写は、ピエール・ロチのやり方に強い影響を受けているが、その描写は西洋人のみならず、日本人にとっても強く記憶

に残るものだ。

その後、鳥根県の松江市の旧制中学校に英語教師として赴任してからも、同様にそこで初めて見聞きする事物を、それは日本人には日常的で陳腐な事柄だが、小泉八雲は新鮮な五感を通して、愛情を持って表現した。そこに、極東の日本まで来た西洋人の自分が最初の日本の理解者であり、その鮮烈な印象を異文化の西洋諸国に伝える特派員としての小泉八雲が見えてくる。

したがって、その独特な日本観を再確認することは、これまでの日本文化を論じた書籍との違いを理解する上でも、また日本文化の独特なあり方を知る上からでも、今後の西洋から見た日本文化の再評価を考えていくためにもとても役立つと思われる。しかも、西洋人ばかりではなく、同時にそれはわれわれ日本人にとっても、近い将来に日本文化の在り方について貴重な示唆を含んでいる。さらに近年特に求められる国際化社会の中での日本の役割を考慮に入れると大変有益な助言ともなることだろう。このように小泉八雲の日本観を考証することは、日本文化の現状をいかに海外に伝えるべきかという今日的な課題についても大いに役立つと思われる。そこで本論文では、『心』をとりあげながら、そこに何度も登場する祖先崇拜について見ていくとともに、小泉八雲の特有の日本観について議論していきたい。なお以下の小泉八雲の英語から引用に関しては、私の納得のいく日本語訳がないために自分で翻訳したものを使用する。

『心』について

『心』は小泉八雲が1890年に来日して6年後に出版された3作目の著書であり、彼の代表的な日本観を描いた評論の1つとされている。彼がその評論を書いた動機はなんだったのか。これまでもさまざまな日本をテーマとした書籍が、すでにアーネスト・サトウなどにより出版されていた。そうしたものに加えて小泉八雲は何を書こうとしたのだろうか。その答えはこの書の副題にある。その副題とは「日本の内面生活の暗示と影響」である。ここでの内面生活とは何を意味するのだろうか。それは、その冒頭にある以下の文章からわかるだろう。今後小泉八雲からの引用はすべて英語の原文と、これまでいくつもの立派な翻訳がなされているが、ここではわたしの日本語訳を併記する。

THE papers composing this volume treat of the inner rather than of the outer life of Japan,—for which reason they have been grouped under the title Kokoro (heart) . Written with the above character, this word signifies also mind, in the emotional sense; spirit; courage; resolve; sentiment; affection; and inner meaning,—just as we say in English, "the heart of things.

KOBE September 15, 1895.¹

ここに収められた論文集は、日本人の外面的な生活というよりもむしろ内面的な生活について書いたものであり、だから、「心」という題名で一括した。「心」という漢字は、情緒的には、人の心を意味するものであり、ほかにも、魂、勇気、決意、感情、慈愛、また人の精神的な内面などを意味するもので、それはちょうど私たちが英語のことばの意味では「物事の本質」と同じものである。

物事の本質に小泉八雲がこだわった理由としていくつかのことが考えられる。まず、1つには、これまで小泉八雲がアイルランドやアメリカにいた時に学んだ日本文化に関する書物があるにはあったが、実際に日本に来てみると、それがあまり納得のいくものではなかった。日本文化を紹介する書籍は多少あったが、それらは小泉八雲にとってはどれも表面的なものばかりに関心があって、西洋人から見た奇異な日本文化ばかりを取り上げて、その奇異なものを日本的、東洋的なものであると紹介し

てあった。その姿勢には奇異さを強調することで西洋人の注意を引いて書籍への注目を浴びようとする安直な考え方がみられる。

それはひどく表面的すぎて、小泉八雲が実際に日本で暮らすようになって感じ取ったものと日本文化を紹介する書籍に記載されていた内容はまったく異なるように思えたのだろう。日本文化の外面的で奇異な特徴ばかりが強調されるばかりで、そこには最も大切な「物事の本質」が描かれていなかったことが『心』執筆の動機になった。つまり、以前の書籍には、八雲が日本人の本質と考えた日本人の内面の繊細さに言及がたりないと思えたのだろう。小泉八雲が失望を覚えたのはそこだった。

その表面的な日本文化の描き方を打破して「物事の本質」に迫るために小泉八雲がとった手法こそ、彼自身が五感で味わった日本の文化を描くことだった。初めて触れた日本文化の第一印象を大切に書きとめそれをことばにすることを第一義としたのだろう。それはこれまでの派手な日本文化論を正すべきだという使命感のようなものにかかれていた。直接自分の五感で捉えた日本文化の神髄である「物事の本質」を説明しようと務めた。それが小泉八雲の日本研究の原点になった。それを自ら語ったものがある。それは、『日本——一つの解明』という1904年に出版された著作で、外国人が書いた日本人の精神史としてひととき異彩を放つものであり、小泉八雲が書いた日本研究の集大成だとされている。

A thousand books have been written about Japan; but among these,—setting aside artistic publications and works of a purely special character,—the really precious volumes will be found to number scarcely a score. This fact is due to the immense difficulty of perceiving and comprehending what underlies the surface of Japanese life. No work fully interpreting that life,—no work picturing Japan within and without, historically and socially, psychologically and ethically,—can be written for at least another fifty years.²

これまでも数多くの書籍が日本について書かれてきたが、その中からある特定の人物を取り上げた芸術的な出版物や書籍などを除くと、本当に価値のあるものは、わずか20冊にも満たないことがわかるだろう。その理由は、日本人の生活の表面にはまったく現れないものを深く知覚し理解することがとても難しいからだ。その内面の生活を十分に解釈する書籍、つまり、日本をその内と外から、歴史的、社会的、心理的、倫理的に記述した書籍は、今後少なくとも50年間は出版される可能性はないだろう。

日本人の生活の表面にはまったく現れていないものを、とりわけ意図的に日本人が表面にはだそうとしない繊細な精神面を書くことはひどく困難だろうと述べている。それが難しいということは、以前に書かれた書籍の事例からも分かるとおり、小泉八雲としてはそれに成功した書籍というものを讀んだことがなかったし、またそれを書こうと試みたものもまったくなかったからだ。さらにはそれを体系的に述べていくには、膨大な資料とそれにまつわるさらに多くの論考が必要とされるだろうし、さらには資料を手に入れた後でもたくさんの時間も必要になると思われたのだ。それは想像しただけでも不可能に近いのは容易に理解できるし、50年の月日をもってしても、その体系の把握には十分の時間ではないと言うのも、その困難さからしても単なる誇張とは言えない。

祖先との関わり

小泉八雲が日本人の生活の表面にはまったく現れないものの一つとして、『心』の中で取り組んだテーマがある。それは20カ所以上で言及されているもので、それは日本人の祖先に対する考え方である。アイルランド人の小泉八雲にとっても、祖先の伝統やその精霊について興味を抱くことは当然の

このように思えるが、日本に居住するようになってからも、日本人の祖先に対するものの考え方が西洋人の小泉八雲にとってはっきりとは言えないものどこか異なることがあると漠然と感じたのであろう。そのために、日本人の祖先との関わり方に強く関心を覚え始めた。

また、精霊などの話についても、ニューオーリンズ時代に小泉八雲がジャーナリストとして生計をたてていたときには、魅了された話題だった。当時は、フランスの怪奇小説の流行などの文学的な影響もあり自らその翻訳などを手がけたことからそのテーマへの関心は一層深まっていた。しかし、その当時にはそれがひとつの継続するテーマとなりえなかった理由は、現地の人々が恐れているのは祖先の精霊ではなく、もう少し卑俗な迷信やたたりといったものであり、あまり深い内面と関わるものとして捉えていなかったからだろう。少なくとも祖先に対する敬意などの感情に関してあまり共感できなかつたからだろうと思われる。むしろ死者と精霊を分けて考えていたからだろう。

池田美紀子は「ハーン・転生・死女の恋—怪談における〈時間〉について」の中で、小泉八雲が訳した『ゴージェエ作品集』の中の「アリア・マルチェラ」に言及したところで「死者の再生、時間を超えた神秘的な感情の交流は、ハーンの生涯愛好のテーマだった」と述べている³。八雲が愛好したテーマかどうかは別にして、議論を進めると池田はこう続けている。

生者と死者のあいだの絆はますます強くなる。生者は少しずつ自分を捨てていった果てに、亡霊に心身ともに捧げてしまう。ハーンは「忠五郎の話」(『骨董』)、「伊藤則資の話」(『天の川綺談』)、「和解」(『明暗』)などで、あの世の恋、死んだ恋人と廃墟で契りを結ぶゴージェエ風の物語を数多く書いている⁴。

死者と転生、それから死者と生者との恋愛の情を絡めた絆などが小泉八雲やゴージェエなどの時代に流行していたテーマであり、当時のフランス文学などにも見られるが、そこには、本論で取り上げている日本人の本質のテーマと根本的に異なる部分がある点は理解されていない。それは、個人と死者の繋がりではなく個人と祖先との繋がりである。八雲自身も含めた西洋人にとっては、愛情などの情感を介した死者との繋がりや転生なども関わりしばしば登場するテーマだが、それが先祖とのつながっているという点が小泉八雲が日本人の本質として見いだした特異な点だった。

小泉八雲は日本での生活のなかで、周りの日本人が祖先に対して行う儀礼などを直接体験しながら、その先祖との関わりについて西洋人と異なるものを五感で知覚した。それは、「日本の内面生活の暗示と影響」を探りながら、日本人が大切にしている日本人の内面の祖先崇拜に八雲が気がついた瞬間だった。

祖先崇拜

祖先崇拜について、小泉八雲はすでにハーバート・スペーサーの論文からその世界的な習俗についての理解はあった。そのことを1904年にマクミラン社から出版された小泉八雲の『日本—一つの解明』という日本人の精神史として日本研究の集大成とされる本に以下の文がある。

“The evolutionary history of ancestor-worship has been very much the same in all countries; and that of the Japanese cult offers remarkable evidence in support of Herbert Spencer’s exposition of the law of religious development. To comprehend this general law, we must, however, go back to the origin of religious beliefs. One should bear in mind that, from a sociological point of view, it is no more correct to speak of the existing ancestor-cult in Japan as “primitive,” than it would be to

speak of the domestic cult of the Athenians in the time of Pericles as “primitive.”⁵

世界のすべての国で祖先崇拜の進化の歴史はほぼ同じだった。日本の祖先崇拜の歴史にもハーバート・スペンサーの宗教的発展の法則を支持する驚くべき証拠がみられる。しかし、この一般的な法則を理解するためには、宗教的信念の起源に立ち返る必要がある。注意すべきことは、社会学的な観点から、日本の祖先崇拜を「野蛮 (primitive)」と評することが間違っていることは、ペリクレス時代のアテナイ人たちの自国祖先崇拜を「野蛮」だと批判することと同じになる。

ハーバート・スペンサーの論文を持ち出しながら全世界的に祖先崇拜の歴史は一般的に見られるので、日本人の祖先崇拜の歴史についてもやはり、その一般的な法則が存在していることを認めている。しかし、問題は、それがprimitive、つまり古くて野蛮なものではないと小泉八雲は肯定的に解釈している点にある。この英語の引用文では、primitiveという英語は本来の原始的な意味合いに、土着とか野蛮とか言った否定的な意味合いが重なっており、八雲は、そうした祖先崇拜を否定的に捉えるべきではなく、むしろ肯定的に捉え、社会学的に法則を見いだすという科学者の姿勢でそれを客観的に検討すべきだと主張している。

こうしたスペンサーの意見に意を強くし、まず、社会学者のように小泉八雲は日本に見られる祖先崇拜を観察した。それが一つ形をとったのが、『心』の第14章の「日本における祖先崇拜の一考察」という論文である。

「日本における祖先崇拜の一考察」

第14章の英語のタイトルは、“SOME THOUGHTS ABOUT ANCESTOR-WORSHIP” というもので、「祖先崇拜の思想」と翻訳するものもあるが、ここでのthoughtsは思想という意味よりもむしろ見解に近いとみなすべきだと思うので、確かに思想にも見解に当たる意味は含まれているけれども、本論では「日本人の祖先崇拜に関する考察」とする。

そして、その「日本人の祖先崇拜に関する考察」の冒頭で小泉八雲はこのように宣言している。

The truth that ancestor-worship, in various unobtrusive forms, still survives in some of the most highly civilized countries of Europe, is not so widely known as to preclude the idea that any non-Aryan race actually practicing so primitive a cult must necessarily remain in the primitive stage of religious thought.⁶

実際に祖先崇拜はさまざまに目立たない形で、ヨーロッパの最も高度に発達した文明国の中にも散見される。その事実はあまり広くは知られていないが、アーリア人以外のすべての人種で、実際にひどく野蛮な崇拜を實踐しているものたちは、当然その祖先崇拜は宗教思想の野蛮な初期の段階にあるに違いないとする考え方を否定するまではない。

このような一般的に野蛮とされる祖先崇拜を野蛮なことであると否定的にみているのは、そこに科学的な姿勢で、それを研究対象から除外しているからだし、そうしたものを論ずる対象には考えられないと思っているからだ。さらに日本人にとって心の支えの一つだと考えている神道を持ち出して、本当に神道の教えなども野蛮だと否定していいのかと問いかけている。そこには、小泉八雲の真意が見える。それこそが、『心』が文明化した西洋諸国の人々に向けてだけに書かれたものではなく、当時西洋化しつつあった日本人に対しても書かれたものだとすることを裏付けている。

Examined with perfect impartiality, I would even venture to say that they are less irreconcilable in more respects than one. They conflict less with our human ideas of justice; and, like the Buddhist doctrine of karma, they offer some very striking analogies with the scientific facts of heredity,—analogies which prove Shinto to contain an element of truth as profound as any single element of truth in any of the world's great religions.⁷

公平無私に検討すれば、神道の方が多くの点で科学と矛盾する点が少ないと言っても過言ではないだろう。神道は私たち西洋人の考える正義とあまり矛盾しないし、仏教の教義の一つであるカルマと同様に、そこには遺伝に関する科学的事実と明確な類似が見られる。そしてその類似から、神道には世界中の偉大な宗教にも共通する単一の真理の要素と同じく深い真理の要素が含まれていることが証明される。

神道

遠田勝は「小泉八雲—神道発見の旅」の中で、こう述べている。

居留地の外国人たちを悩ませていたことが、もう一つあった。神道がどんな宗教なのか、さっぱりわからないことである。19世紀中におもだった経典が次々と翻訳された仏教と違って、神道には信頼できる翻訳も正確な解説も皆無だった。しかも、この未知の信仰こそ、維新政府成立の原動力、文教政策の中心理念、いわば新興日本の国教であると喧伝されていた⁸。

しかも神道について、当時の外国人は彼らからすると道徳律もなくまったく評価するべきではないものと批判していた。アメリカ人宣教師のサミュエル・ブラウンなどは「(神道は)内容空虚で無味乾燥である」⁹とまで見下している。こうした神道に対する批判的な発言の中で小泉八雲は意見を異にした。それは、彼の遺作となった『神国日本』の中に断言してあるとおり「日本人の文化と精神の根底にあるものは神道である」(上記p. 359)と理解していたからである。遠田勝はその理解の発端となった事件は、小泉八雲の杵築への訪問だとしている¹⁰。実際に、小泉八雲は「杵築」の中でその訪問をこのように総括している。

しかし、私にとって杵築を見たことは、見事な殿社の拝観にとどまらず、それ以上のはるかに大きな意義があった。杵築を見る—それはとりもなおさず神道の生きた中心地を見ることであり、知られざる太古の昔より今この十九世紀に至るまで、いささかも衰えることなく力強く脈を打ちつづけた古代信仰の、生命の鼓動にじかに触れることなのだ¹¹。

杵築という「神道の生きた中心地」を見ることで、小泉八雲は古代信仰の、生命の鼓動にじかに触れたのである。彼は、出雲大社に初めて昇殿をはたした西洋人として自負している¹²。西洋人としては初めて実際に神道を自分の五感を駆使して体感した。それは科学的には理解できない、感情としてその信仰だった。だからこそ、他の西洋人と異なり小泉八雲は神道を評価したのだろう。知識として理解するのではなく感情で理解すること、それ以外にはおそらく神道の「本質」を理解できなかったかもしれない。書物や客観的な事物からの知識としての理解であれば、ヘボンやブラウンなどの理解と共通したものになっただろう。しかし、それを信仰心だと捉えれば、知識からだけで理性的に神道を理解することなどできないのは当然だった。その意味では、小泉八雲はおそらく最初に神道を感得した西洋人と言ってもいいだろう。

しかし、明治維新後の表面的な西洋思想の信奉者となった近代的な日本の知識人の中には率先して、神道などを非科学的だと軽蔑するものたちがいた。彼らに対しても小泉八雲は神道は日本の固有の思想であり、その神髄だと断言する。だからこそ、祖先の残した文化の優れた部分を表面的にではなく、profoundという言葉が示すように、内面的な深い部分に焦点を当てて、目には見えない神道を解釈すべしとしている。さらには神の解釈の問題を取り上げる。

“That every impulse or act of man is the work of a god, and that all the dead become gods, are the basic ideas of the cult. It must be remembered, however, that the term Kami, although translated by the term deity, divinity, or god, has really no such meaning as that which belongs to the English words : it has not even the meaning of those words as referring to the antique beliefs of Greece and Rome.”¹³

人間のあらゆる衝動や行動は神の御業であるということ、そして、すべての死者が神になるということが、神道の基本的な原理である。しかし、これには留意する必要がある。神道の「神」という用語だが、一神教の神、多神教の神、またはユダヤ教・キリスト教の神などと翻訳されているが、実はその「神」という語は英語のGodと同じ意味ではなく、しかも、ギリシャとローマの古代の信仰に関する神の意味とも異なっている。

小泉八雲の神道理解

小泉八雲が自分の日本での生活を体験するなかで観察した結果、明らかに、彼の感じた日本の神と西洋のGodが異なっていると述べている。その違いとは日本の神が死者と強く関わっている点である。小泉八雲にとっては、神道の神が意味するものは、宗教的にいえば、死後の人間の「魂」を意味するものだというのであり、死者の魂こそが、超人的な力を持つと日本人が考えていると理解したのである。日本人の考える神とはそうした祖先たちの靈魂を意味し、そこに日本人は神髄を見いだしていると考えた。小泉八雲は、だからこそ、日本人は死後の名誉をことさらにこだわっていると解釈した。

Although essentially superior to the living in certain respects, the living are, nevertheless, able to give them pleasure or displeasure, to gratify or to offend them,—even sometimes to ameliorate their spiritual condition. Wherefore posthumous honors are never mockeries, but realities, to the Japanese mind.¹⁴

日本では生きているものよりも神は本質的に優れているとされるが、生きているものは神を喜ばしたり、不快感にしたり、満足させたり、また気分を害させたりできる。さらに時には神の霊的ランクを高めたりもできる。日本人にとって、死後の名誉は決して冗談などではなく、とても現実的な問題になっている。

小泉八雲は日本人の神が西洋の神と異なる理由としてこの死者と生者の関係をあげて、死後の名用の問題に踏み込んでいる。西洋人には、小泉八雲も含めて、日本人がことさらに自分の死後の名誉を重要視する理由が理解できなかった。西洋人の小泉八雲にとって、死者の定義が日本人と異なっていたからだ。それは日本の死者と生者と神に関して、“SOME THOUGHTS ABOUT ANCESTOR-WORSHIP”の中に死者と神についての論考にみられる。

For the purpose of this little essay, it will be sufficient to consider the Kami as the spirits of the

dead,—without making any attempt to distinguish such Kami from those primal deities believed to have created the land.¹⁵

この小さなエッセイの目的からすれば、日本の神は死者の靈魂と定義するだけで十分だろう。—国を造ったと信仰されているような原始の神々とそれを区別しようとしても意味がないだろう。

この小泉八雲の神の定義に従い、神は死者の靈魂であるとするのなら、亡くなった先祖の多くの先祖も神そのものであるという考えが成り立つ。その上、日本人にとって、死者が神になるということは理解が容易になる。また、人間と神とを峻別する西洋の信仰の歴史から考えれば、それは日本の考え方は独自と言ってもいいだろう。そこで、その神が生者の生活に及ぼす影響にもこのように言及している。

With this general interpretation of the term Kami, we return, then, to the great Shinto idea that all the dead still dwell in the world and rule it; influencing not only the thoughts and the acts of men, but the conditions of nature. "They direct," wrote Motowori, "the changes of the seasons, the wind and the rain, the good and the bad fortunes of states and of individual men." They are, in short, the viewless forces behind all phenomena.¹⁶

神という用語のこの一般的な解釈で日本の偉大な神道の思想に戻れば、あらゆる死者たちがまだこの世に存在しており、この世を支配しているという考え方だ。そして、その影響力は人々の思想や行動だけでなく、自然の天候にまでも及ぶ。「神の支配は季節の変化、風と雨、国家と個々の人々の運と不運にも及ぶ」と本居宣長も書いているが、それは要するに、神とはあらゆる自然現象の背後に存在する目に見えないエネルギーそのものなのだ。

神のエネルギー

この神のエネルギーとはどんな力を持つのか。それは生者のあらゆる行動を左右するエネルギーだ。その考え方に立つと、「FROM A TRAVELING DIARY」に出てくる初恋の解釈も納得がいく¹⁷。初恋の相手は個人的な感情で決定されるのではなく、それは運命的にすでに先祖の影響によりあらかじめ決定されているというものだ。

そのような先祖、死者、神を結びつけた考え方が小泉八雲の目には日本人に特有の内面的構造として映っていた。しかし、こうした考え方は、近代の思想家には、不可能に思えるだろうし、とても科学的とは思えないものの、心理的な遺伝の法則を考慮に入れば納得できるとしている。

さらに進めて、人間の不運はthe Gods of Crookednessという神からなされるものだという本居宣長の説を引用し、キリスト教に見られる神と切り離れたdevilという存在に言及する。日本ではそのような悪い神も先祖の靈として、エネルギーを持っており、生者がその神をなだめることでその力に影響を与えられると解釈している。一方で、西洋には神に影響を与えるほどの力を持った生きた人間は存在しない。さらに小泉八雲は議論を進める。

Out of these primitive, but—as may now be perceived—not irrational beliefs about the dead, there have been evolved moral sentiments unknown to Western civilization. These are well worth considering, as they will prove in harmony with the most advanced conception of ethics,—and especially with that immense though yet indefinite expansion of the sense of duty which has followed upon the understanding of evolution.¹⁸

これらの死者に関する原始的な野蛮な信仰から、今ではお分かりの通り、それは、不合理な信仰からではないのだが、西洋文明には知られていない進化した道徳的な感情というものが生じた。そしてその感情は検討する価値がある、なぜなら、それは倫理的な最も進んだ概念と一致すると証明されるからである。特に進化論の理解をさらに進めた巨大であるがまだ際限のないほど大きく増大した義務感と一致している。

ここで理解される日本人に特有の神への信仰が道徳感情と結びつくのは、神が人間とは隔絶した絶対的な存在ではなく、生者との関わりを通じて変化する結果として日常的な人間の個人の生活が大きなものであるために、それがさらに倫理的な感情へと密接に結びついている。聖者と先祖の霊のコミュニケーションが、時として、西洋人にとって日本の神の理解をいっそう複雑にしている。しかし、こうした神の人間化を考えると、小泉八雲がその神に道徳的な感情を見出すのは自然なことである。

その神道に見られる道徳的な感情について、小泉八雲は西洋人に理解されやすいように、それを科学的に再認識しようと試みる。その一例として取り上げたのが、道徳的な感情の中の、神道に見られる過去への感謝の念である。西洋人の神には日本の神のように、道徳的な感情を持ったものがないというのだ。それは、科学では、その知識を西洋人は過去に記された書籍などから得るもので、先祖の霊魂などとは切り離して考えるのが通例であり、それによって得られる知見は真実として尊重するものの、その知見に感謝の念などの感情は入り込む余地はない。

永遠の真実

その一方で、八雲の理解では、日本人は知識からえる利益そのものよりも、それがもたらした運命に対して、もっと言えば、先祖の霊魂に対する感謝の念が最初にくるという理解である。こうした非合理とも取れる見解に対して、近年の西洋における科学の研究者たちですら、野蛮人とみなされるようなものたちが、科学とは異なる道からむしろ「永遠の真実」¹⁹に到達したと認める発言もあると、おそらく、ハーバート・スペンサーなどを意識して唱えている。小泉八雲はその上、この永遠の真実には、むしろ、神道などの手法でしか到達し得ないとまで考えている。こうした過去の祖先に対する慈しみの情は、家族愛や愛国精神などを育んだ。こうしたことは小泉八雲が英語教師になりたての頃に学生が口にした「先祖の名誉のために」というような言葉は当初あまり理解できなかったと告白している。日本人にとって死者は生きていて感じられるようになった。こうした祖先崇拜のあり方が神道の理念になっていると考えたのである。

自然の理解

花や木にも感情があるとする神道思想の中に、新たな可能性を見いだしたのが小泉八雲である。西洋人の考え方や家族のあり方が破綻していると述べ、その様子を過去の西洋の遺跡にたとえ、こうした遺跡などと同様に祖先崇拜や先祖に対する感謝の念も西洋は崩壊しているが、まだこの日本にはそれは残っていると述べている。西洋ではそうした祖先崇拜の概念が崩壊したことで、西洋は花や木などへの理解も失ってしまったと考えている。その代わりに台頭してきたのが個人の快樂の追求であり、個人のエゴイズムに現れているとする。一方で日本人は、自然と一体化することで、富の共有の概念が生じた。質素を好み、自分を鑑みない精神生活はこのようにして生まれてきたとしている。その中でも小泉八雲が目にしたのが母の愛情である。その神聖とも言えるような母の愛も、祖先崇拜の土台の上になるものだから、性欲とは無縁なのだとも述べる。そのような中で子供を産み育て、子孫は物

質的なものではなく、その精神生活を連綿と受け継いでいると理解した。細胞分裂のようにそのような子孫が増える。こうして日本人は今もなお先祖崇拜の念を受け継いで生活している。その中で、神道の「全てのものは死んだ先祖が決定している」という信念を揺るぎないものにしている。こうしたものは表面的な日本人の生活を外部から見ただけでは全く察知することはできない。最後に小泉八雲はこうした結論に達した。

The teaching of Evolution is that we are one with that unknown Ultimate, of which matter and human mind are but ever-changing manifestations. The teaching of Evolution is also that each of us is many, yet that all of us are still one with each other and with the cosmos;—that we must know all past humanity not only in ourselves, but likewise in the preciousness and beauty of every fellow-life;—that we can best love ourselves in others;—that we shall best serve ourselves in others;—that forms are but veils and phantoms;—and that to the formless Infinite alone really belong all human emotions, whether of the living or the dead²⁰.

進化論が示唆していることは、私たちはその未知の根本原理と一体であり、物質と人間の精神は絶え間なく変化する現れにすぎないということだ。また同時に、私たち個人個人の数が多いが、それが互いに一体であり、また、宇宙とも一体であるということ、すなわち、過去の全ての人類が自分一人の中にいるだけではなく、同様に、同胞の貴重で美しい一人一人の生命の中にも存在するということを私たちは知るべきだ。また、私たちは他人の中にある自分自身こそ最も愛すべきということ、また、他人の中に見られる自分こそ最も役立つということ、その外観はボールに包まれた幻想にすぎないということ、そしてそれは、生死にかかわらず、あらゆる人間の感情は形のない無限のものだということなども示している。

結論

このような一連の考察の中で、小泉八雲は日本に暮らして長期間の生活の中で謎と思われた日本人の精神生活を自分なりに解釈しようとした。その見解は、日本を美化しすぎているとか、日本人の精神性を本当に理解しているのかという批判や疑問もあることは当然であるが、われわれが注目すべきこととしては、当時の日本から小泉八雲が何を学ぼうとしたかということである。それまでは、遠田勝の言うように²²アーネスト・サトウやバジル・チェンバレンなどとともに、西洋人から見て奇異だと思われることを他の日本文化研究者たちと同様に冷笑することも可能だったのだろう。

しかし、小泉八雲が日本語を読めないこともあるが、むしろ日本語の理解からくる偏見を持たず、この「野蛮な」国である日本での生活を直接体験し、西洋人の小泉八雲が、マルティニークや自分の住んだヨーロッパの都市などと比べて、必死にそこに欠けているものを自分の感覚を最大限に活用し、目には見えないが、その奥に確固として存在する精神性の理解にまで踏み込もうとした。彼のそうした姿勢は教え子に伝わり、彼らは必死になって、日本文化のありさまを報告した。その報告を受けて小泉八雲がやろうとした事は、最初に述べた通り、西洋人のトラベラーのように、そこにある雰囲気できるだけ明瞭に伝えようとしたのであり、ブルーノ・タウトやウィリアム・アストンなどのように日本についての研究を専門的に書いて公刊にするような事は一切考えていなかったのである。

むしろ、自分の体験から五感を通して感じられる目には見えないものや耳には聞こえないものなどを「奇妙なもの」とせずできるだけ率直に語ること、その奥に垣間見られる日本人のこころの神髄を自分の感性で想像力を豊かにして物語ることこそが彼がこの書物を書いた目的だった。すべての木や石にも見えないものが宿っていると素朴に信仰している日本人にとっては最もありふれた考え方

が、西洋人には伝えきれないジレンマを感じながら、小泉八雲はそれが神道思想の中心にあることに気づいた。そこには連綿と続いている先祖崇拜の信仰が理知的ではなく感情的に根付いていた。この神髄の先祖崇拜について書かれたのが『心』という書物であり、それを小泉八雲はほかの日本文化に関するものと同じように文学として想像力を用いて、感情を込め描き切ったのである。

註

- 1 Lafcadio Hearn, 'Kokoro,' in *Out of East and Kokoro*, Houghton Mifflin Company, Boston and New York, 1922, p. 264.
- 2 Lafcadio Hearn, *Japan : An Attempt at Interpretation*, Houghton Mifflin Company, Boston and New York, 1922, p. 3.
- 3 平川祐弘編『小泉八雲 回想と研究』株式会社講談社, 1992年, p. 313.
- 4 池田美紀子「ハーン・転生・死女の恋」平川祐弘編『小泉八雲 回想と研究』株式会社講談社, 1992年, 314ページ。
- 5 Lafcadio Hearn, *Japan : An Attempt at Interpretation*, Houghton Mifflin Company, Boston and New York, 1922, p. 23.
- 6 Lafcadio Hearn, 'Kokoro,' in *Out of East and Kokoro*, Houghton Mifflin Company, Boston and New York, 1922, p. 467.
- 7 Lafcadio Hearn, 'Kokoro,' in *Out of East and Kokoro*, Houghton Mifflin Company, Boston and New York, 1922, p. 468.
- 8 遠田勝「小泉八雲 神道発見の旅」, 平川祐弘編『小泉八雲 回想と研究』株式会社講談社, 1992年, p. 360。
- 9 遠田勝「小泉八雲 神道発見の旅」, 平川祐弘編『小泉八雲 回想と研究』株式会社講談社, 1992年, p. 359
- 10 遠田勝「小泉八雲 神道発見の旅」, 平川祐弘編『小泉八雲 回想と研究』株式会社講談社, 1992年, p. 360。
- 11 小泉八雲著 平川祐弘編『神々の国の首都』株式会社講談社, 1990年, p. 173。
- 13 Lafcadio Hearn, 'Kokoro,' in *Out of East and Kokoro*, Houghton Mifflin Company, Boston and New York, 1922, p. 468.
- 14 Lafcadio Hearn, 'Kokoro,' in *Out of East and Kokoro*, Houghton Mifflin Company, Boston and New York, 1922, p. 469.
- 15 Lafcadio Hearn, 'Kokoro,' in *Out of East and Kokoro*, Houghton Mifflin Company, Boston and New York, 1922, p. 470.
- 16 Lafcadio Hearn, 'Kokoro,' in *Out of East and Kokoro*, Houghton Mifflin Company, Boston and New York, 1922, p. 470.
- 17 Lafcadio Hearn, 'Kokoro,' in *Out of East and Kokoro*, Houghton Mifflin Company, Boston and New York, 1922, p. 308.
- 18 Lafcadio Hearn, 'Kokoro,' in *Out of East and Kokoro*, Houghton Mifflin Company, Boston and New York, 1922, p. 476.
- 19 Lafcadio Hearn, 'Kokoro,' in *Out of East and Kokoro*, Houghton Mifflin Company, Boston and New York, 1922, p. 477.
- 20 Lafcadio Hearn, 'Kokoro,' in *Out of East and Kokoro*, Houghton Mifflin Company, Boston and New

York, 1922, p. 497

- 22 遠田勝「小泉八雲 神道発見の旅」, 平川祐弘編『小泉八雲 回想と研究』株式会社講談社, 1992年, p. 413。

〈キーワード〉

ラフカディオ・ハーン, 『心』, 先祖崇拜, 神道, ハーバート・スペーサー

貝嶋 崇 (現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコース)

(2022. 8. 29 受理)